

民俗学か文学か？
岩手山麓で聞いた口頭伝承

柳田國男と、

『遠野物語』の足跡

民俗学の父柳田國男が著した『遠野物語』は、日本の民俗学の黎明を告げた名著として知られる。柳田國男は如何にしてこの書を書き下ろしたのか。遠野民話との出逢いから、出版までの足跡を辿る。

文◎大村仁 写真協力◎遠野市立博物館

佐々木喜善なくして

『遠野物語』なし

『遠野物語』は、明治43年（1910）6月14日、柳田國男による自費出版の形で刊行された。部数はわずか350部。中表紙には通し番号がふられ、記念すべき第1号は佐々木喜善（鏡石）に贈られている。佐々木喜善とは、遠野物語の冒頭で「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治42年の2月ごろより始めて夜分折々訪ね来たりこの話をせられしを筆記せしなり」と書き記したその人である。

遠野物語の著者が柳田國男であることは周知の事実だ。しかし、佐々

木喜善からの聞き書きによって誕生したというその経緯ゆえ、柳田國男単独の著書であると解釈することに疑問を呈する研究者もいる。確かに聞き書きによる本は、語り手を前面に出すのが一般的だといえる。遠野物語は、語り手と聞き手が逆転した異例の出版物となったわけだが、遠野物語誕生の背景にいったい何があったのだろうか？

『遠野物語』刊行のもう一人の功労者

柳田國男は東京帝国大学法科大学を卒業後、農商務省農務局農政課に勤務。産業組合の設置を推進すべく、全国の農山村を歩き回った。その過程で、各地方の村々の実情をつぶさに観察し、その風習・風俗に強い関心を抱いたという。そして、明治35年（1902）に法制局参事官に任官される。遠野物語を出版した年には、兼任内閣書記官記録課長という役職にあった。

一方、岩手県土淵村（現遠野市土淵）の裕福な農家に生まれた佐々木喜善は、語り部だった祖父の影響もあって幼い頃から民話や妖怪話の中で育った。東京に出て哲学館（現東洋大学）に学ぶが、早稲田大学文学科に転学。その頃、詩人で歌人、自然主義の小説家でもあった水野葉舟の紹介で柳田國男と会う。

ところで、この水野葉舟は、当時欧米で流行っていたスピリチュアリ



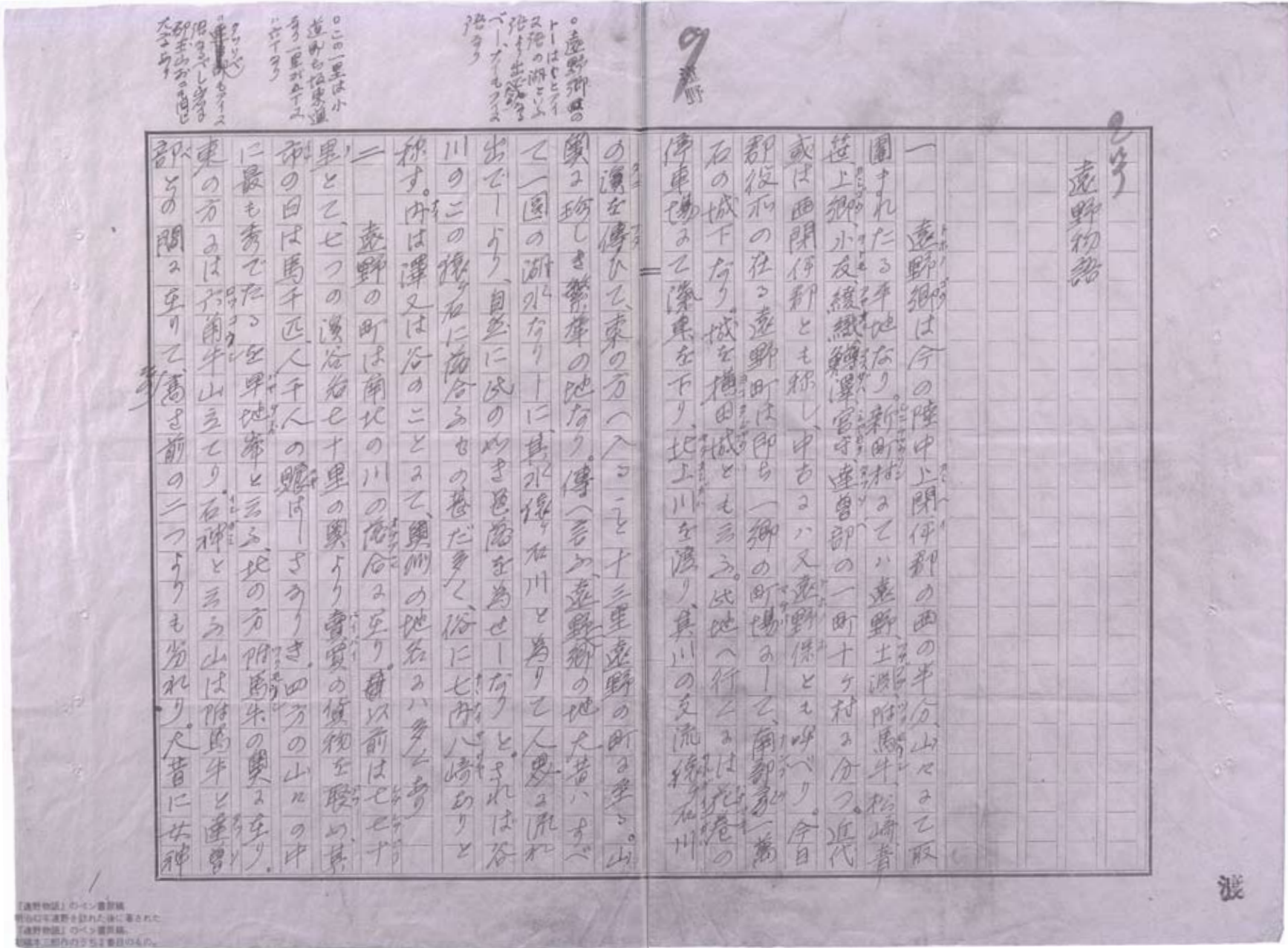
佐々木喜善

明治42年（1886）、岩手県遠野市土淵生まれ。小説「長靴」で認められ、作品を次々と発表した。が、病気のため小説家を断念。郷里に戻った後は、土淵村の村長になるも、政治家に向かない性格ゆえうまく行かず、家族を伴って仙台へと移住。ラジオの東北土俗講座を主宰するなどしたが、生活は苦しかったという。腎臓病のため48歳で死去。



柳田國男が遠野旅行で宿泊した高善旅館

『遠野物語』発刊1年前の明治42年8月24日から27日まで遠野を旅している。その際、宿泊した宿が高善旅館で、現在は遠野昔話村の敷地内に移築され、資料館となっている。

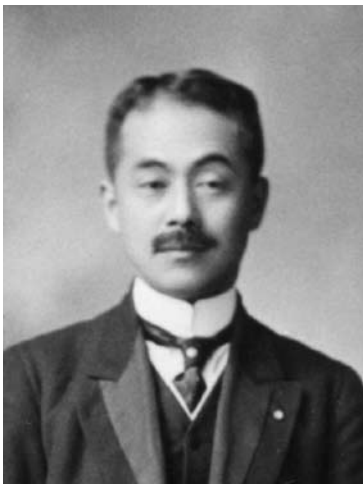


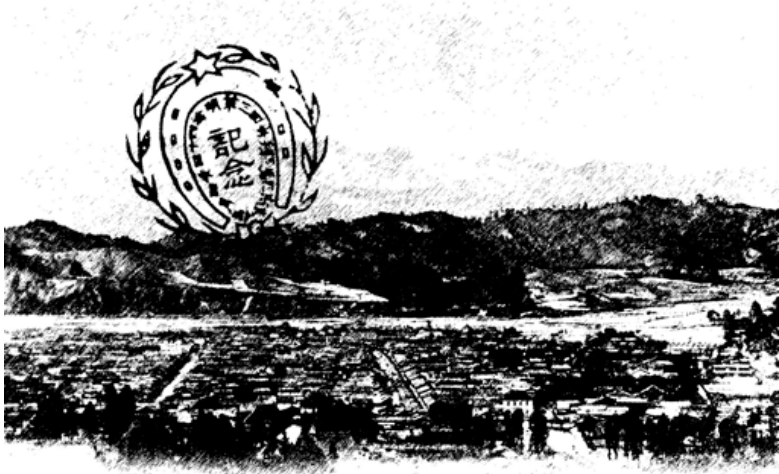
『遠野物語』原稿「再稿本」

和紙に毛筆で墨書きされた初稿本から、再稿本は原稿用紙にペンで書かれ、本文は刊行時と同じ119話となり、序文や題目などが整えられ、ほぼ完成に近い状態になっている。また、活字のポイント数や挿し絵の入れ方も朱筆で指示されている。遠野市立博物館蔵（遠野市指定文化財）

柳田國男

明治8年（1875）、兵庫県神崎郡福崎町の代々医家だった松岡家の6男として生まれる。幼少時代から読書家で、新体詩人、官僚、朝日新聞社客員、日本民俗学会初代会長など、多方面で活躍する。昭和37年（1962）死去。





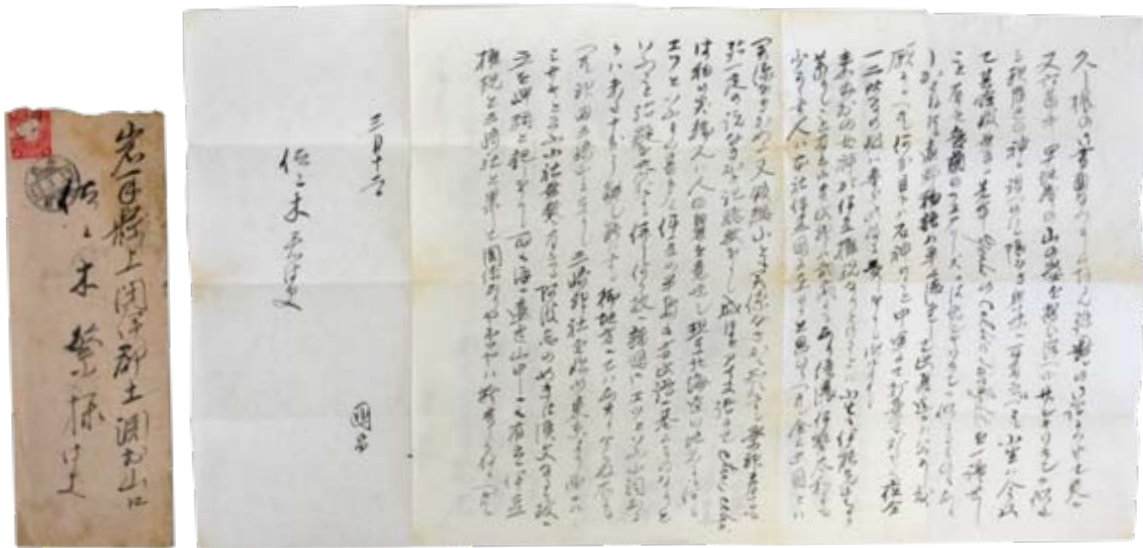
100年前に撮影された遠野市街の様子

遠野は沿岸部の釜石・大船渡などからの海産物、平野部の北上・江刺方面からの農産物と山間から牛馬などの商いが行なわれた交易の町として大いに賑わっていた。



柳田國男生家

兵庫県神崎郡福崎町西田原1038-12
TEL：0790-22-1000
開館時間：9:00～16:30
休館日：月、祝の翌日、年末年始
入館料：無
問い合わせ：福崎町立柳田國男・松岡家記念館



佐々木喜善にあてた柳田國男の書簡と手紙

遠野市立博物館には、柳田國男が佐々木喜善にあてた手紙や書簡が数多く残されている。これらは、佐々木家から寄贈されたもので、保管状態がよく、佐々木喜善の几帳面さを伺い知ることができる。佐々木喜善は死の直前まで日記を書き残しており、遠野物語の研究ならびに佐々木喜善の功績を検証する上で役立っている。上の写真は、明治43（1910）年3月12日の書簡。下の写真は明治42（1909）年4月17日のはがき。遠野市立博物館蔵



ズムの影響を受け、妖怪ブームに沸き立っていた日本文壇のご多分にもれず、妖怪話の研究に没頭していた。佐々木喜善とは明治39年（1905）に知り合い、妖怪話の語り手として彼に興味を覚え、親交を深めた。そんな中、明治41年（1907）文学者サロン「龍土会」で柳田國男と妖怪談義を通じて意気投合。やがて柳田國男へ佐々木喜善を引きあわせその話の輪に加わり、後に自らの体験・見聞を小説にしている。

この3人を引きあわせた引力は、佐々木喜善の内に秘めた遠野の民話だった。また、水野葉舟がいなければ、柳田國男と佐々木喜善が出逢うこともなく、遠野物語もこの世に誕生していなかったかもしれない。

運命の出逢いに導かれ 新たな時代の扉が開かれた

佐々木喜善が語る遠野の民話を聞いた柳田國男はすぐさま自宅に招き入れ、遠野の民話の数々を書物にしようと思い取りを始めた。時に明治41年（1908）、柳田國男は33歳の官僚、佐々木喜善は22歳の学生。立場や年齢の差を超え、2人は遠野に伝わる民話や伝承を熱心に文字へと転換する共同作業に没頭した。

遠野物語は聞き書きと前述したが、正確には一部佐々木喜善が文章で提供した部分もあるという。となると、遠野物語は柳田國男単独の作品ではないように思われても無理はない。

遠野物語が刊行された際、柳田國

男が佐々木喜善に贈った第1号の扉には、「御初穂ハ佐々木君ニ 國男」と毛筆で書かれていた。柳田國男自身、この本が佐々木喜善なくして成立し得なかったこと、佐々木喜善こそ遠野物語誕生の最大の功労者であることは充分に認めていたであろうし、序文に佐々木喜善との聞き書きであることと明記している点からも、彼に対し最大の敬意を表していたことは想像に難くない。

民俗学が文学か、その評価の行方は？

遠野物語はその評価を巡って、もうひとつ意見の分かれる点がある。すなわち「民俗学書なのか、文学書なのか」という点である。

遠野物語が刊行された当時、日本人の起源や地域の風俗・民俗への関心の高まりはあったものの、民俗学というジャンルは確立されていなかった。遠野物語は、日本民俗学の扉を開いた記念碑的な学術書という認識が一般的だが、「民俗を研究した学術書」ではないと指摘する研究者もいる。その根拠として、柳田國男自身が遠野を巡り歩いて調査した訳ではなく、佐々木喜善単独からの聞き書きによるものだったこと。また、

柳田國男は序文の中で、「自分もまた一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり」と記していることに對し、柳田國男のフィルタ―によって脚色・演出された以上、学術的根拠は薄いというのだ。

柳田國男は、18歳のとき、歌人の松浦辰男に師事し、歌人としての才能を開花させた。親交のあった森鷗外が主宰する月刊文芸雑誌『しがらみ草紙』に短歌の作品を投句している。また、田山花袋や島崎藤村、国木田独步などとの親交もあり、『叙事詩』を出版している。養子入りをし柳田姓となり、官界に進んだ後も文人たちとの交流は続いたものの、自身の悲恋体験もあり次第に文学から遠ざかっていく。

遠野物語に記された民話や伝承の話はすべて文語体で書かれ、その文学的完成度の高さは、初版本を贈られた文人たちから非常に高く評価されている。田山花袋にいたっては、

「祖野を気取った贅沢。さう言った風が到る処にある。私は其の物語に就いては、更に心を動かさないが、其物語の背景を塗るのに、飽まで實際の觀察を以てした処を面白いとも意味深いとも思った。読んで印象的、芸術的にはいいのは、其内容よりも寧ろ其材料の取扱方にある（インキ壺）」と評している。

また、昭和10年（1935）「遠野物語拾遺」209話を加えた『遠野物語 増補版』が再版された際、金田一京助は絶版となった遠野物語の復刊に對し「此こそ実に、日本全土を茫然として興りつゝある郷土研究―祖国文化の再認識―日本民俗学の、今を去る四半世紀前、始めて呱呱の声を挙げた最も記念すべき最大の文献である。」と賞賛している。「遠野物語という文学か、民俗学か」。そのどちらでもよいのだ。遠野物語が書かれた時点で、双方の歴史が大きく動いたのだから。



遠野市立博物館

遠野物語の世界、遠野の自然と暮らし、風樹舎（ビクターセンター）の3ゾーンからなり、マルチスクリーンや資料展示を通して、遠野の風土全般を理解できるようになっている。遠野物語関連の研究資料の販売、閲覧も可能。

岩手県遠野市東館町3-9
TEL：0198-62-2340
開館時間：9:00～17:00
（入館受付16:30まで）
休館日：5～10月（月末日）、11～3月（月曜、月末日）、11/24～30、1/28～31
料金：一般310円（260円）高校生以下210円（150円）小・中学生150円（100円）※（ ）内は団体20名以上の場合
http://www.city.tono.iwate.jp/



案内人
大橋 進

『遠野物語』の研究を通じて、あるべき日本人としての精神を取り返すひとつの「文化装置」として設立された遠野物語研究所の副所長として、学術的見地からの研究、セミナー、遠野巡礼、昔ばなし教室などの運営に携わる。

座敷わらし、カッパ、オシラサマ……に会おう、遠野旅

今もこの地に伝わり残る

遠野民話と民間信仰

岩手の県南、北上高地の山間を流れる猿ヶ石川流域に遠野市はある。

柳田國男が『遠野物語』を出版して100年。

今も遠野には、物語に描かれた民話や信仰が息づいている。

昔と今の時空を超えた、陸奥の神話の世界を旅した。

文◎大村仁 撮影◎編集部NK

山に宿りし神々への信仰が
今も息づく民話の里

「遠野郷は今の陸中上閉伊の西半分、山々にて取り囲まれたる平地なり。（1話）」

柳田國男の遠野物語の本文は、この書き出しで始まる。遠野は猿ヶ石川の湖水が乾上がりできた平野である。四方を山々に囲まれ、中でも町の北に聳える早池峰山、東の六角牛山、西の石上（神）山は、今も遠野三山と呼ばれ信仰の拠り所である。

その底流に流れているのが、山の神に対する信仰である。遠野物語の2話には、

「大昔に女神あり、三人の娘を伴いてこの高原に来たり、今の来内村の伊豆権現の社ある処に宿りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を与うべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華降りて姉の姫の胸の上に止りしを、末の姫眼覚めてひそかにこれを取り、わが胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峯の山を得、姉たちは六角牛と石神を得たり。若き三人の女神おのの三の山に住し今もこれを領したもうゆえに、遠野の女どもはその妬みを畏れて今もこの山には遊ばずといえり」

と、神が山に宿った経緯を伝えている。また、女神とその三人の娘が

大昔に女神あり、
三人の娘を伴いてこの高原に来たり(2話)



恐ろしいのに、
何故か憎めない異形

かっぱぶち
カッパ淵

カッパ伝承は、全国に散在する。通常は青いが、遠野のカッパは赤色をしている。その正体については、凶作の口減らしのため川に流した子供の生まれ変わりという説や水神説など、一定していない。遠野でカッパが目撃されている場所は、水の事故が多かった淵などに集中しているため、子供に危険な場所で遊んではいけないという戒めだったという説もある。また、遠野物語にはカッパの子どもをはらんだという話が幾つか登場するが、夜這いの風習の名残なのか、謎は尽きない。



三姉妹の女神が各々
鎮座する遠野三山

さんめがみ はやちねじんじや
三女神と早池峰神社

遠野の市街から北に位置する早池峰山(1914m)、東の六角牛山(1294m)、西の石上山(1038m)を遠野三山と称する。この三山こそ山で働き、山で生計を成してきた人々が多い遠野地方に根付いてきた山神に対する篤い信仰心を表している。『若き三人の女神がおのおの三の山に住し今もこれを領したもうゆえに、遠野の女どもはその妬みを畏れて今もこの山には遊ばずといえり。(2話)』という原文からも女人禁制の山ということがわかる一方で、男子が成人するために遠野三山を徒歩で巡る「三山駆け」という儀礼も伝わっている。



ーと言えるのではないか。デンドラ野に立つたとき、その穏やかな風景に癒され、少しだけ死に対する不安や恐怖が和らぐような感じがした。厳しい自然と暮らしの中で育まれてきた妖怪や物怪たち

遠野物語を読んだことがなくともカッパやザシキワラシ、雪女などの話を、誰しも一度は見聞きしたことがあるだろう。遠野物語には、妖怪もしくは物怪の類の話が数多く紹介されている。ザシキワラシのように、今もそのご利益にあやかろうとする人が絶えないという例もある。柳田國男は『妖怪談義』の中でこれを妖怪に分類しているが、遠野物語の中

デンドラ野は生から
死途への通過点

デンドラノ

遠野地方のデンドラ野には幾つかの箇所があったとされ、それぞれの範囲も決まっていたと考えられている。それが、やがて集約されるようになっていった。特に土淵村字高室のデンドラ野(右の写真)は規模が大きく、土淵村の大半を範囲としていたという。デンドラ野へ行く途中の小烏瀬川に架かる橋の欄干には姥をおぶって捨てに行く若者(おそらく息子であろう人物)のレリーフが刻まれている。いわゆる姥捨て伝説ではなく、現世と死後の世界との境界の地ともいわれている。過去にはこの高台から数多くの老人たちが旅立って行ったのだろうか。



宿ったという伊豆権現は神遣神社と呼ばれ、早池峰神社へ向かう途中の峠に鎮座している。

生と死、現世と冥界が
交錯するコスモロジー

「デンドラ野」「ダンノハナ」という言葉が遠野物語には登場する。「デンドラ野」とは、蓮台野が訛った言葉であり、蓮のような平地が広がった台地状の場所という意味です。昔は60歳になるとこのデンドラ野にやってきて余生を送りました。老人たちは、里に下って田畑の仕事を手伝ったりして食をつないだと言われています。一般的に、デンドラ野は『姥捨て山』と解釈されていますが、いわゆる栖山節的姥捨て山とは違ったようです。デンドラ野にやってきた老人たちと里人との関係性は途切れていなかったようであり、そう

考えるとちよつと明るい気持ちになりますよね」とは遠野物語研究所の大橋進氏。

ポジティブに考えると、現世から御仏の蓮の台上で暮らせると言うことは、ありがたいことでもあると言える。もしかすると、このデンドラ野とは現代のグループホームのような存在だったのかもしれない。

平野に突き出た丘状の地形をダンノハナ(檀の塙)と呼ぶ。ダンノハナは、館のあった時代に囚人を斬った場所という言い伝えもあるが、今は集落の共同墓地である。ダンノハナとデンドラ野は集落を挟んで向かい合った構造になっている。

遠野物語では、「山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺及び火渡、青笹の字中沢並びに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれ

遠野民話と民間信仰



地域に暮らす人々が
たどり着く最期の場所

ダンノハナ

ダンノハナは、丘が鼻のように平地に突き出た部分を指している地形のことで、遠野物語111話の頭注にあるように、『ダンノハナは檀の塙なるべし。すなわち丘の上に塚を築きたる場所ならん。境の神を祭るための塚なりと信ず。蓮台野もこの類なるべきこと「石神問答」にいえり。』と自説を述べている。しかし、遠野物語では館のあった時代は囚人の刑場であったり、近隣の死者を葬る共同墓地であったとも記されている。

と相対して必ず蓮台野という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追いやるの習いありき。

老人はいたずらに死んでしまうこともならぬゆえに、日中は里へ下り農作して口を糊したり。そのために今も山口土淵辺にては朝に野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。(111話)」

と記されている。

人は老いて死ぬ。この当たり前の自然の摂理の前にあっても死への不安、死の恐怖は拭えない。デンドラ野は余生を過ごす生の空間、ダンノハナは墓地のある死の空間と位置づけられている。言い換えれば、デンドラ野は現世から冥界へ旅立つための停留所であり、ダンノハナは終着点のようなものだろう。まさに、生死観を現世に実在化したコスモロジー

神隠しにあった
寒戸の娘の悲話

さむとのばあ
寒戸の婆

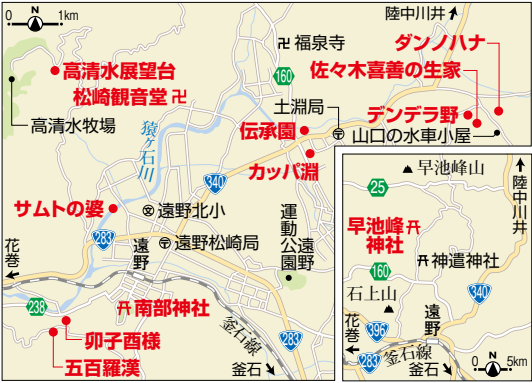
ある日、松崎村の寒戸の民家で、若い娘が梨の木の下に草履を脱いだまま行方不明となる。月日が経ち30年ほどして年離れた女性が親族の集まりに現れる。その女性こそ、昔、行方不明になった娘だった。どのようにして帰ったのか皆が尋ねたのだが、ただ会いたかっただけだけ答え、またいずこかへと去っていった。その日は風が強く寒い日だったので、遠野では今でもそうした日には、寒戸の婆が出るといわれる。その日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、きょうはサムトの婆が帰って来そうな日なりという。(8話)』



沼の主の恋物語から
主はいつしか縁結びの神様へ

うねどりさま
卯子酉様

かつて、祠のそばを猿ヶ石川が流れていて、そこに大きな淵があった。その淵の主が村の娘に恋をしたが、その娘は主のところへ嫁ぐのが嫌で病気になるでしう。父親はせめて死んだ娘の亡骸だけでも淵の畔に埋めてやる。ほどなく娘の亡骸はなくなっていた。という遠野の昔話が伝わっている。ここから、赤い布を結んで沼の主に縁結びの願をかけると叶ったとされ、今もカップルや若い女性が訪れる人気のスポットになっている。



【アクセス】
遠野市街地へは東北新幹線新花巻駅から車で約1時間。早池峰神社は遠野駅から同約30分。ダンノハナ、ダンラナノへは約20分。
【観光の問い合わせ】
遠野市観光協会 TEL:0198-62-1333



家に吉事をもたらすとして
大切に信仰されてきた2神

オシラサマとオクナイサマ

オシラサマ、オクナイサマともにその起源は定かになっていない。オシラサマは東北一帯に分布しており、一般的には蚕の神、農業の神、馬の神と考えられているが、馬と人間の娘が結ばれるという話から4世紀半ばに書かれた「探神記」まで遡ることができる。オクナイサマは『オシラサマを祭れば幸多し(15話)』にあるとおり、縁起の神様と考えられる。『オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴いて在す神なり。されど、オシラサマはなくてオクナイサマのみある家もあり(70話)』

遠野民話と民間信仰

オシラサマ、オクナイサマ、ザシキワラシがあげられている。
遠野ふるさとガイドの菊池氏は、「貧しい百姓の娘と飼馬が夫婦になり、それを知った父親が怒って馬の首を切り落として殺してしまいます。やがて娘はその首に乗って天に昇っていくという話がオシラサマ信仰のベースになっています」と、この地に伝わる物語を話してくれた。
オシラサマのご神体は桑の木を削って馬頭型と姫型の2本の棒状である。その胴部分に布をかぶせてお祀りする。オシラサマは養蚕の神であり、眼の神、女の病を祈る神、また子供の神としても崇拝されている。
オクナイサマは、オシラサマのある家には必ずあるといわれる。棒状

型、仏像型、掛軸型の3種類があり、かつてはどの家々にもあったとか。土淵町の阿部家には、人手が足りないとき田植えを手伝ったと遠野物語15話で紹介されているオクナイサマそのものが現存するのが、遠野という風土のおもしろさだろう。庶民の生活の中にこうしたエピソードがほかにも数多く存在しているのだ。
遠野には、文明社会を迎えた今も遠野物語が息づいている。それは、「文明では人の心は救われない。信仰という魂の拠り所が必要だ」というメッセージを、文明に浸りきった現代人に投げかけているかのようだ。そしてこれからも、この地には柳田國男と佐々木喜善の綴った世界が生き続けていくのだろうか。



岩手・遠野 伝承園オシラ堂

蚕、農業の神としても知られるオシラサマ。たくさんの願いを込めて千体が飾られている。
岩手県遠野市土淵町土淵6-5-1
TEL:0198-62-8655
開園時間:9:00~17:00 無休
料金:大人310円、小中高校生210円

オシラサマというのは
この時よりなりたる神なり

遠野には家々毎に神あり
祈りと共に生きる民

遠野物語の題目には家の神として、

とのお屋 要

プライベートな時間を満喫してほしいと、1日1人もしくは2人1組限定。まさに隠れ家的宿だ。独創的な家庭フレンチを中心に、自家製チーズ・プロシュット・どぶろくなどを堪能できる。

岩手県遠野市材木町2-17
TEL:0198-62-4395
チェックイン15:00/アウト10:00
1泊2食付き2万3000円~
(2名の場合)
tonoya-you.com



高校教師を定年退職後、生まれ育った郷里の魅力をもくの人に伝えるため、遠野市観光協会の遠野ふるさと観光ガイドとして活動している。
「ガイドの問い合わせ」
遠野市観光協会
遠野市新穀町5-13
☎0198-62-1133



案内人
菊池 孝